

2020年9月25日 第3337回例会

於： 横須賀商工会議所



<点鐘・開会> 12:30 岡田 会長

<斉 唱> 「我等の生業」

<ゲスト紹介> *一般社団法人シンクパール(Think Pearl)

代表理事 難波 美智代 様

<会長報告> *ガバナー事務所より

・インドからの緊急国際支援要請に対するご協力のお願いについて

<委員長報告> *R財団委員会 三堀委員長よりR財団セミナー 報告

*インターアクト委員会 鈴木(外)委員長よりインター・ローターアクト委員会 報告

*ローターアクト委員会 角井委員長よりインター・ローターアクト委員会 報告

*記念史委員会 物井委員長より70周年記念誌のお知らせ

<幹事報告> *11月6日開催予定のLook for Treasure at Peninsulaの申込締切
10月2日

*9月でクールビズ終了するが、当RCでは10月以降もネクタイ着用は必須としない

<出席報告> *出席委員会 小林(一)委員長より9月25日の出席報告

会員数	出席対象者数	出席数(ZOOM出席数)	欠席数	メイクアップ数	出席率
118名	106名	73名(6名)	33名	4名	72.64%

<ニコニコ報告>

- ・三 役 一般社団法人シンクパール代表理事 難波美智代様ようこそお出でくださいました。卓話よろしくお願ひいたします。
- ・Loknath、畑、松本(外)、田中、後藤、中村(外)、梁井、大野、田村、鷺尾、中山、小山(外)、福西、勝間、田邊、若松、澤田、上林、長坂、鈴木(外)、木村、藤村、白井、猿丸、勝見、前川、長尾、西村(外)、齋藤(外)各会員
一般社団法人シンクパール代表理事 難波美智代様ようこそお出でくださいました。卓話楽しみにしています。
- ・小林(外) 会員 SAAさんいつもニコニコ例会の準備お疲れ様です。
- ・八巻、岡田、角井、馬場、北村、瀬戸、福西、徳永、三堀、波島 各会員
最近寒くなりましたが、オープントップバス平気かな～。みんなで楽しみましょう。
- ・大石、岡田、岩崎、大野、加藤(外) 各会員
負けるな翔猿。ガンバレ貴景勝！ついでに正代！大相撲の行方は如何に・・・。

<卓 話> 「コロナ禍に考えたい就労世代のがん予防」

一般社団法人シンクパール
代表理事 難波 美智代 様

皆様こんにちは。一般社団法人シンクパールの難波美智代と申します。ご紹介いただきました通り、私は地元追浜高校の出身で、遡りすぎてわからなくなりますが第27期になりますので、同級生の方などもおられるのではないかと思います。なかなか地元で講演をする機会をいただけない中、最近ではコロナ禍でZoomなどでの講演のことが多く、こうして実際に集まって講演をさせていただく機会があるのは素晴らしいなど、こうした活動の素晴らしさを噛みしめております。本日は卓話のお時間をいただき、「コロナ禍に考えたい就労世代のがん予防」についてお話をさせていただきます。



私は、横須賀の海と空と太陽のもとで育ちました。先程ご紹介いただきましたが、まさかの四半世紀前にミス横須賀という立場をいただき横須賀のPRをする機会もいただきました。

私自身の活動に入りますが、シンクパールでは、「人生に笑いを、健診に愛を。」というキャッチコピーで、テーマとしてがんの予防、そして早期発見を呼び掛けております。

健診って行かなきゃとか、面倒だなという気持ちもあり、なかなか自身の健康を振り返る機会ってないと思います。年を重ねればあちこち痛いとなりますが、元気なうちは気にならないものです。1年に1回でもいいから自身の健康を振り返る、そして家族の健康を願うきっかけとして健診があるということ、自身をチェックしておくこと、メンテナンスを習慣化するということが自身を大切にできる愛を持って、人生を生きていくということにつながるのではないかと思います。

若い女性のがんは子宮頸がんが中心で、その当事者世代、大学生や20代の社会人を100名くらいインターンや自身の専門性を活かして社会活動にかかわるということをやりながら「女性からだ会議」と称して活動をしております。われわれの活動の中に「医療の一手手前をつなぐ」というコンセプトがあり、医師にかかる一手手前をどうつなぐかという活動も行っています。

私自身の話になりますが、2009年、会社を経営して36歳の時に子どもが一人いる中で、突然、子宮頸がんと宣告されました。36歳の時点で将来の出産の可能性を失ったのです。早期発見で、痛みも何もなかったのですが、子宮を全摘するというところまで進んでおり、そうせざるを得なかったという経験があります。それまでは、毎日髪を振り乱しながら仕事に邁進していたのですが、健康を損ねてみて、身体が資本だなと感じました。今コロナ禍で、日々健康で過ごすことの大切さを皆さんも感じておられると思いますが、私もがんになってみて、それまでは出産以外で一度も入院をしたことがないほど元気だった自分にとって、優先順位が何なのかと考えさせられました。人生にこんな転機、危機があるなんて何で知らなかったのだろうとすごく考えさせられました。これまで、1年に1万人、11年で約11万人の方に講演をさせていただきましたが、お伝えした皆さんが声を揃えて言われるのは、「こんな大切なことをなぜ今まで教えてくれなかったのだろう」ということです。様々な方がご自身の健康を振り返ってみて、身体のこと、健康のことを学ぶ機会がなかったなど実感されるようです。私自身、女性からだ会議というものを運営させていただいていますが、何かあった時のために備えとして引出しを持っておいてもらうことが重要だと考えて、学びの場を提供しています。ここには企業の方、教育機関の方と、医療や行政とつなぐ役割を担っています。昨日は中小企業の人事コンサルの方々にセミナーをさせていただきましたが、今、「健康経営」のエントリーが始まっていますので、その中で女性の健康やがんの対策にかかわる部分が評価指標として含まれていますので、そのコンサルティングなどもしております。また、若い女性向けに情報コンテンツの制作や相談窓口の支援なども行っています。毎年やっている「地球女性からだ会議2020」を10月2日に議員会館で行います。オンラインでも実施しますので、お知らせいただければ無料で参加いただけます。

がんの話に移りますが、「がん対策基本法」が制定されたのは、実は2006年、最近のことです。最近のがんについて告知されることが多くなりましたが、それまでは、告知されるケースは少なかったため、そ

の後は正しく告知を行うスキルや、コミュニケーションのあり方などが重要になってきました。続いて、就労世代のがんについてですが、ご存知の通り日本は世界でトップレベルの長寿国で、平均寿命は女性が世界第2位、男性が第3位です。寿命は長いのですが、健康な状態で生活できる健康寿命は低いとされています。また各国の高齢化率の推移と将来見通しについては、日本は他の国に比べて断崖に高いことがわかります。2050年には高齢化率が38.8%に、2100年には41.1%になるであろうとされています。そして、少子高齢化が進むと、労働人口が減少し、産業力が低下、国内産業の空洞化が生じ、消費の減少により経済力が低下し、その結果社会保障制度が破たんするという、国家存続の危機に至ると言われ、ここ30年ほど少子化対策というものが行われてきています。そんなわけで、女性が働くということが社会のニーズとして謳われてきて、ここ10年くらいは女性活躍を言われています。女性活躍推進法などもここ6年から10年くらいの間に制定されてきました。現在、労働力人口の44.1%が女性となっています。そんな中で最近話題となっているのが、男女平等のジェンダーギャップ指数というもので、先進国を含めた153か国で、日本は121位という先進国の中でほぼ最低レベルというところに位置しています。この大きな要因が、経済活動への参加と機会、そして政治への関与が著しく低いということにあると言われています。ここでいつもお伝えしているのが、健康と生存に対してはあまり言及されておらず、単に寿命が長いというだけで見過ごされがちで、健康寿命という観点で健やかに亡くなるまで過ごしているかというところではなく、今後この要素が加味されてくるとさらに順位が下がってしまうのではないかとされています。

そこで、働く女性たちの身体の状態についてですが、社会進出が増えるにつれ、婦人科系疾患を抱える働く女性の年間の医療費支出が大きく上がってきています。その医療費支出と生産性損失が年間合計で6.37兆円という数字が出ており、税収の約3%を占めているとされています。女性が働くことでGDPが上がっていくと言われる一方で、働く女性のこのような状況が国家損失にもつながるということが、大きな問題となっています。

がんはすごく遠いものと、特に若い方は思いがちですが、今年生まれてくる命が年間で約86万人に対し、がんと宣告される方が年間で101万人もおおられ、圧倒的にがんになる人の方が多いという状況です。これだけ身近なところにがんはあるのだということです。先日国立がんセンターから、女性も生涯のがん罹患リスクが50%を超えたという深刻な発表がありました。その中でも、20代から30代のがん患者の80%は女性なのです。それだけ若い世代のがんはほとんどが女性であるということです。50代になるまでは、ほとんど女性の方が多く、乳がんに至っては9人に1人が罹患しているという状況です。一方、子宮頸がんですが、20代から30代が多く、なかなかその年代で自分ががんになったということを周囲に言えないのが実情です。この年代で子宮頸がんになって、私のように出産が出来ない身体になったりすると、本当に結婚だとか恋愛も躊躇されてしまうということがあり、周囲の理解がないと、子どもは生まないのかとか、子どもが産めない身体なのだとってしまったり、傷つけてしまうこともあります。今、子宮頸がんは毎年約1万人、上皮内がんを含めると3万人が罹患し、1日あたり8名の方が亡くなっています。この解決の糸口はあります。これは、教育・啓発、そして企業内での制度や就業モデルの設計、更に適切な医療へのアクセスをすることで対応できると言われています。また、お金と仕事にかかることですが、若い世代のがんだと圧倒的にちゃんとした保険に入っていないケースが多いですね。手術や治療のこと、仕事のことなど様々な不安を抱えながら、更にお金の不安は非常に大きいのです。だから、きちんとしたがん保険に入ったり、就業のサポートにはどのようなものがあるのかというようなことを心得ておくようにとお伝えしています。こうした健診とワクチンがある子宮頸がんなので予防はできるのですが、どうしてなるのかということがあまり理解されておらず、男性の方にもこのことを知っていただきたくて、少し触れさせていただきました。この子宮頸がんの原因となるHPVウィルスは性交渉を通じて感染し合う病気で、経験のある80%の方にリスクがあり、結局みんな関係があるということなのです。ここからがん化するかどうかは1000人に1人とされていて、誰がその1人になるかはわかりません。なので、健診やワクチンが必要で、それではほぼ100%予防ができるというのは子宮頸がんだけなのです。

そして、皆さんにコロナ禍にお伝えしたい就労世代のがん予防に関してですが、生活習慣の乱れ、早期発見の遅れ、治療への影響の3つが言われていることです。緊急事態宣言時の検診受診率が、4月で昨年度の15%、5月で8%となっています。3割減るとがんの発見が4000人近く減ると言われており、ここは蜜を避ければ健診受診は問題ないので、是非とも従業員の方には健診受診を勧めてほしいと思います。

最後に健康経営に関してですが、現在募集が始まっており、一昨年より女性の健康に関する要綱や受動喫煙に関する項目が入ってきました。是非いろいろと取組んでいただくことで、労働生産性や社員のモチベーションにもつながると言われています。せっかく確保している人材を、病気で失うことがないように、会社でのサポートもお願いしたいと思います。

私は、ミス横須賀の時に「あなたの好きな映画は何」と聞かれ、SCENT OF A WOMANという映画を答えました。その映画の中で、女性がタンゴを踊ろうと口説かれた際に、自分はタンゴを踊れないと答えたところ、主演のアルパチーノが「タンゴは人生と違って足が絡まっても踊り続ければいい」と言ったフレーズがすごく好きだったからです。私は人生も同じで、足が絡まって転んでしまっても踊り続けることが大切だなど、横須賀に戻ってきて改めて感じています。今日は短いお時間でしたが、今日のお話を少しでも持ち帰っていただき、何かのお役に立てるとうれしいなと思って、今日の卓話を終わらせていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

<閉会・点鐘> 13:30 岡田 会長

週報担当 中山 尚